

エンタメ



笑福亭 たま

国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2019」の企画展「表現の不自由展・その後」が中止になった。標準的なツッコミとしては「まさに表現の不自由!」「平和の少女像って、すぐ揉めるやん!」という話だが、ここで改めて「アートとエンタメの違い」「政治が文化を後援すべきか」を感じた。

■ アートもエンタメも ■

演芸はアートではなくエンタメなので「見てもうてナンボ」である。つまり毎回、撤去され続ける商品を作る芸人は、ご飯が食べられない。もし、旧日本軍の慰安婦を象徴する「平和の少女像」を芸人が展示するならその横に「少女像を撤去する人の像」も展示しておくだろう。今や、この少女像に反発する人がいるのは分かっているのだから、これは必要だ。しかし、今度はこの「撤去する人の像」に反発する人が現れるのが予想されるので、さらに横に「少女像を撤去する人の像を撤去する人の像」を置く必要がある。当然その横には「少女像を撤去する人の像を撤去する人の像を撤去する人の像」を置かなくてはならない。

楽しませるものなのに



寄席で演者名を記す「名びら」を持つ筆者

これを撤去する人の像をドンドン作っていく。おそろくタイトルは「少女像(を撤去する人の像×n回)、n↓∞」となるだろう。どっちから怒られそつだが、結果はどうなんだろう? 平和の少女像はあくまで「平和」を祈念した像であり、少女像を撤去したい人も本当は平穏な日常を望んでいるに違いない。もしこれで怒られたとしても怒られるのは作者だけで、考えの違つ両陣営同士は揉めたことにはならない。何となく、こんながエンタメで、アートとの違いな気がする。

それと、橋下徹氏が大阪市長時代の二〇一二年に「文楽がエンターテインメントになっていない」と発言し、補助金削減に動いたのを思い出した。今回もそつだが、公費が少しでも出ると、文化的活動運が悪かったで終わりだ。ところが、公費のものは「俺の金でこんなもん開催しやがって!」と声高に言う人が現れる。アートもエンタメも本当は誰かを楽しませるためのものなのに、誰かが悲しむのを見るのはつらい。

こんなことになるなら、文化的なものに公費はもう要らない気もする。でも私個人はやっぱり助成してほしい。落語への公費募集中!

(落語家「次回掲載は九月十九日」)

はすぐにパッシングを受ける。私企業の商売なら、嫌なら見に行かなければいいだけだ。もし見に行つて不快だったら、